COMBAT
コンバットマガジン
Sept.,2018
No.510
9

Cover Illustration
M. Kelly(Satoshi Okada)
ⓒ WORLD PHOTO PRESS 2018
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

056 【Pick Up!】
VEHICLE of BATTLE FIELD
～戦う日本車～
Photo & Text by Toru Yokota

005 トランプの国境
US-Mexico Border Surveillance

021 月刊 THE グリーンベレー GREEN BERET
イラク開戦！グリーンベレー市街地戦闘編

第6回
Psychological Operation in Vietnam War
THE PAPER WAR
ベトナム戦争のペーパーウォー

026 CHIEU HOI PROGRAM
チューホイ大作戦

036 VIETNAM WAR STYLE GUIDE
中田商店のレプリカでベトナム戦気分を満喫する

ベトナム戦争アクションシリーズ
042 MIG17 vs A-1 Skyraider

048 ベトナム戦争コンバットカメラマンストーリー
第2回デニス・ギボンズ インタビュー Part1

054 コラム ベトナムを遠く離れて――。文／小倉 徹

The Equipments of the U.S. Force
070 [現用米軍装備カタログ]
ABA社part5 ABAベストを着こなしてみよう

098 シン・サバゲ三等兵
【うらわ近接戦闘スクール出張受講編】

102 ニッポンの力こぶ
災害派遣における国民の頼もしい味方
「第6後方支援連隊」

106 NEW GENERATION STYLER
うらきん勢、エアコキ・ガスブロ限定定例会に行く。

東京マルイ
080 HHK416
デルタカスタム・ブラックモデル

085 WESTERN ARMS
ボブチャウ・スペシャルVer.1.5
《ブルースチール・カスタム》

089 WESTERN ARMS
S&W M4013 TSW PCカスタム
《CBHW Ver.》

092 Militaria Roundup!
アメリカ空軍フライング・スーツ

120 トイガンニュース
●東京マルイ BIOHAZARD アルバート.W.モデル 01P
●WA SVインフィニティ・マイアミ・ティキ
●タナカ M40ベトナム／カートリッジVer.

COMBAT FRONT LINE
064 注目のインドアフィールド、アリーナ シャングリラOPEN!
065 ぴっちょりーな、実銃射撃in微笑みの国!
066 東京マルイP-90 Ver.LLENN
067 ワールドクロスサーガ ―時と少女と鏡の扉―／ワクサガ×東京マルイ・コラボ
068 平成30年度 陸上自衛隊 協同転地演習

114 サバゲ三等兵APS部
116 新製品てんこ盛り! COMBAT mono
123 US Shooting Life
124 レアミリタリーテクノロジー
125 兵装嗜癖
126 ゲームOTT
127 CIC
128 PRESENT
142 バックナンバーリスト
143 次号予告

Blue In Green
8 Greene Street New York, NY
HIROSHI OKAMOTO
ART EXHIBITION
JULY 19-29, 2018

GENUINE TOYS McCOY QUALITY
ULTIMATE SEEKER

ミリタリースポッター
この夏、NYCソーホーにて。
「トイズマッコイ」を生きてきた男、岡本博を読み解く。

一人の映画スター、スティーブ・マックイーンが生きた時間のすべてを、つまり映画作品はもちろんのことビハインド・ザ・シーンとオフの時間に確実にいたはずのマックイーン自身を、読み解くことに魂を捧げてきた。それが岡本博という人物の行動ノルムである。

JULY 19-29、2018 HIROSHI OKAMOTO, Artist Exhibiton at Blue In Green 8 Greene Street, Soho, New York City
Photo/TOYS McCOY

Photo/DVIDS

Photo/Shutterstock.com

トランプの国境

「わたしはグレイトウォールを建てる。だれもわたしより上手に壁を建てられるものはいない。信じていい。
グレイトウォールを、とても安上がりにつくる。わたしはグレイト、グレイトウォールを
アメリカの南の国境に建てる。壁建設の費用はメキシコに払わせる。よく聞いておけ。」
2015年の6月、大統領選挙の立候補演説でトランプが吠えまくった。
どうせ大統領になれるわけない。だから吠えさせておけという大方の予想は覆された。
2017年1月20日、トランプは聖書に手を添えて、第45代米大統領に就任する宣誓を行った。
ここに、国境の壁建設は動き出した。

文と構成／編集部　Photo/Kesaharu Imai, WPP Collection

U.S.ARMY 5th SPECIAL FORCE GROUP IRAQ 2003-2004 MOUT

文と写真／Djちゅう　Photo/U.S.Army、ジェフリィ提供（P24〜25）

イラク開戦！グリーンベレー市街地戦闘編

さて、前回はアフガニスタンを舞台としたホースソルジャーについて語りましたが、今回は所変わって2003〜04年ごろのイラク。「初期アフ」みたいにキャッチーなフレーズが浮かびませんが、しいて言えば「初期イラク」ですかね。うーん日本語の語感としてはいまいち。昨今ヒットしたアニメタイトルみたいに4文字がしっくり来るんですが……「初期イラ」いやもうなにがなんだか。そんなことはさて置き今回はイラク戦争が開戦した直後のグリーンベレーのお話です。

テレビで見たあの光景は今でも忘れません。アメリカNYの貿易センタービルに旅客機が突っ込み崩壊していく様子。そう、9.11同時多発テロ。当時中学生だった僕でも「これは世界が変わってしまう」となんとなくですが感じたものです。未曾有の恐怖感と若干のワクワク感。あのような悲惨な事件にワクワクするのはもちろん不謹慎だと思いますが、男子中学生ですからそんなもんです。まだミリタリーにさほど興味なくガンダム少年だった僕ですが、毎日のようにニュースで見る砂漠迷彩を着たアメリカ軍がなんだかカッコよく見えちゃって。そんなころ中学生DJちゅうはPS2ゲーム「METAL GEAR SOLID 2」にドハマリし、そして映画「ブラックホークダウン」をついに観てしまう。あれよあれよで気付いたら手元に東京マルイM4A1がありました。高校生の頃だったと思います。（※当時は条例も無く18歳未満でも買えたんですよね）ちょうどその頃、1学年下の後輩もソマリア紛争について学ぶために同映画を授業で観たらしく、それがきっかけでクラスメイト数名集まったサバゲチームが誕生してました。なんでやねん。

サバゲを始めたきっかけはさて置き、どうも形から入ってしまう僕は当時テレビで見ていたイラクで活動するアメリカ軍に憧れを抱いていました。砂漠迷彩にウッドランドのボディアーマー。昔はベトナム戦争や湾岸戦争だったように、僕らは言わばイラク世代なのでしょう。ちなみにアラサーです。

前置きが長くなりましたが、イラクでフセイン政権の打倒と対テロで従事したのは陸軍特殊部隊グリーンベレーも例外ではありません。2003年3月に開戦し同12月フセインは逮捕されイラク政府が新しく生まれ変わります。しかし戦闘は終結したわけではなく反米武装勢力との戦闘やシーア派スンニ派の抗争、いわゆるテロとの戦いが始まり日々戦いは激化。ほかにもグリーンベレーは新生イラク軍の訓練やISOFの設立に投じていくわけです。

THE グリーンベレー GREEN BERET

元グリーンベレー ジェフリー・ガーウィッチ氏（写真中央）

チームメンバー2人に囲まれたジェフリー氏。5thSFG時代に派遣されたイラクでの一枚。2004年頃撮影。BALCSの前面を横向きウェビングの、いわゆるRANGERタイプのものに換装している。MOLLE2などのポーチを直接取り付け。

第6回

Psychological Operation in Vietnam War

THE PAPER WAR

ベトナム戦争のペーパーウォー

CHIEU HOI PROGRAM

チューホイ大作戦

Text & Leaflet Images/SGM Herbert Friedman (Ret.)
Coordination/Mikako Burks (PPI)
Editor/Kiyoko Kawamura

「両手を広げて、無条件であなたを受け入れます」と北ベトナム兵士に向けての宣撫工作を行った。それがチューホイプログラム、別名オープンアームズ作戦である。自由でいいことだらけの南へ、安全に寝返ることができるように、「チューホイ」と記した黄色い通行パスを空から撒いた。

チューホイ作戦で投降してきた兵士は南でプロパガンダに使われた。

チューホイプログラムとは、南ベトナム政府軍側へ投降するように北の兵士に呼びかける作戦である。オープンアームズ作戦ともいう。オープンアームズとは、文字どおり「両手を広げて、無条件であなたを受け入れます」の意味からきている。南ベトナムにいたサイオプ部隊は、1963年3月以降、フル稼働をはじめている。

それに先だって、アメリカ陸軍第7心理作戦部隊の前身は、すでに1958年2月に沖縄の浦添市牧港補給地区に駐留していた。トンキン湾での事件以後、アメリカ軍はベトナム戦争に本格介入していくのだが、それと歩を合わせるようにして1965年10月に、正式に第7心理作戦部隊として昇格・強化されている。かなり早い段階から、心理作戦を担当する部隊が沖縄にいたことになるが、部隊の存在は大っぴらにはされていなかった。アメリカ連邦議会でさえ、実態を知る人は少数だったとされている。それだけ謀略性が高く、極秘扱いが前提の存在だったわけだ。沖縄のキャンプキンザーに駐留していた同部隊が、解体されるのは、ベトナム戦争の行方が定まった1974年6月である。その間、約16年にわたり、ベトナム、北朝鮮などの共産圏の国に対する謀略活動の宣撫工作をつづけていた。宣撫するとは人心をなでさするようにして、安心、安定させるのが目的だ。実際は、「寝返った方が身のためだ」といっているわけだ。

VIETNAM WAR

1968年頃。ベトナム、フォクトゥイ省。王立オーストラリア連隊第7大隊の兵士が固形燃料を燃やして粉末コーヒーを湯に溶かしてコーヒーを入れているところ。レーション（食糧）の缶詰の蓋が開いていて、そこから直接スプーンで食事をしている様子がうかがえる。

Combat Photographer Story

第2回
デニス・ギボンズ インタビュー part 1

SHUTTER CHANCE

ベトナム戦争コンバットカメラマンストーリー

Denis Gibbons Interview

Photo/Denis Gibbons（Courtesy of Shaun Gibbons）　Interview／Libby Stewart　翻訳／伊藤浩子
The interview is published with permission from the Australian War Memorial.

激しいゲリラ戦が戦われたベトナム戦争中に、部隊の指揮官に「おまえのことは守ってやれないぞ」と言われながらも前線基地にとどまり続けた戦争カメラマン。彼の写真は、毎週のように多くの雑誌に掲載され、兵士たちが見たかのような目線で戦争を伝えるものだった。基地内に寝泊まりし、オーストラリア軍や米軍の精鋭部隊に同行してシャッターを切り続けたデニス・ギボンズが、2004年にオーストラリア戦争記念館のインタビューに答えた貴重な記録を2回にわたってご紹介する。

1987年にシドニーで開かれたベトナム戦争退役軍人パレードの記念品として作られたと思われるパッチ。中央にベトナムの国のシルエット、カンガルー、そしてベトナムで授与されたオーストラリア軍の勲章リボンが描かれ、周囲にはオーストラリア・ベトナム軍、1962−1973年と刺繍されている。

1966年頃のデニス・ギボンズのドッグタグ。身元確認用に2つのドッグタグで一組になっており、ギボンズ、デニス S、オーストラリアの特派員、血液型O+、宗教は英国国教会と記されている。

Photo/Australian War Memorial, Order 13251541

VEHICLE of BATTLE FIELD

戦う日本車

Photo &Text by Toru Yokota

荒野を走る鉄のカタマリ――。
報道カメラマンとして世界中を駆け巡る横田 徹氏。
彼が今まで経験した幾多の紛争地帯で、土煙を上げて走る車の多くは日本製のモノだった。
なぜ彼の地で日本車は選ばれるのか?
それは過酷をきわめる環境下での圧倒的な信頼性と耐久性にある。
作り手の意図しない戦場での活躍にスポットをあて
その理由に迫る、専門誌にしかできない“車特集”――!

TOYGUN REPORT

次世代電動ガン

HK416 DELTA CUSTOM Black

東京マルイ

●Photo＆Text by Taku
㈱東京マルイ
☎03-3605-3312 http://www.tokyo-marui.co.jp/

HK416 DELTA CUSTOMが装いも新たにブラックモデルとして登場!!

存在自体がナゾばかりのアメリカ軍の特殊部隊「DELTA FORCE」。その米軍最強の特殊部隊が採用したといわれているHK416のカスタムモデルが『HK416 DELTA CUSTOM』だ。

特殊部隊では、使用する火器の自由度が比較的高く、作戦や目的に合わせてさまざまな武器を使い分ける。これは従事する作戦によって少しでも有利に運ぶためチョイスだと考えられる。

東京マルイでは、このデルタフォースが使用するHK416のカスタムモデルの情報を入手し、次世代電動ガンとして見事に再現した。僅かな資料の中から再現するのはかなりの苦労を強いられるだろうが、こういったところはさすが東京マルイといったところだ。

前回のデルタカスタムが発売されたのは2017年のこと。5色の異なる色合いで構成されたタンカラーモデルだが、今回発表されたのは、スタンダードなブラックモデルである。

近頃は実銃の世界でもメーカー純正でもタンカラーやアースグリーンなどのカラーが使われたモデルも増えたが、やはりブラックモデルも根強い人気を持つ。これは日本のトイガン業界でも同じで、いまだにブラックモデルが人気なのである。

タンカラーモデルもなかなか良かったが、ブラックモデルとなった事で全体に引き締まって精悍さが増した。

デルタカスタムの特徴のひとつであるガイズリータイプのレイルハンドガードは、左右と下面にレイルマウントを任意の位置に配置する事が可能となっており、使用するユーザーの好みに合わせて取り付けられる。これによって、かなりの軽量化が可能となった。

トップレイルはマズル先端からレシーバーまでフラットなので、レイザーモジュールやダットサイト、スコープなど、各種サイトを複数搭載してもグラつく事なくシッカリと取り付けられる。

レシーバー、レイルハンドガード、フラッシュハイダー、バレルといった各部分には金属が多用され、剛性はかなり高い。また質感においても実銃に近い仕上がりとなっているのもこのモデルの魅力に大いに貢献している一つだろう。サバゲなどで使用するのであれば、もう少し軽い方がラクだろうが、リアル感を考えると、これくらいの方がベストだろう。

可倒式のフロント&リアサイトはマウントタイプとなっており、任意の位置に取り付け位置を変更可能。もちろん本物同様にフロントサイトは上下、リアサイトは上下左右の調整が可能なのはいうまでもない。

金属を多用しているので、剛性の高さは文句ナシ。少々ラフに扱った程度では壊れるような事はない。全体の作りがシッカリしているからこそ、バレルのフリーフローティング化も可能にした。

フラッシュハイダーを外せば、14㎜逆ネジが現われる。これにより、サイレンサーなどの各種マズルオプションを装着可能だ。

6ポジションに長さを調節可能なクレーンタイプ・ストックや、左右どちらからでも操作可能なアンビセレクターなど、近年のアサルトライフルでは定番となった機能も搭載している。

手にした感触としては、実際の重量よりもバランスが良いからか、軽くて扱いやすい。

3kgを超えているので重量自体はかなりのハズだが、構えてみると、思ったほど重さは感じられない。長時間扱うとなればこの重さはきつく感じるだろうが、サバイバルゲームのように短時間の使用ならば、とくに気にならないだろう。

HK416に限らず、近年のモデルはオプティカルサイトやライトモジュールなどのアクセサリーを装着して使用する事が多いため、実際に使用する場合はこの重量よりも+1～2kgほど重くなる事が予想される。かなりの重さではあるが、機能性を考えれば致し方ないところなのかもしれない。高性能になれば重量が増してしまうのは致し方のないところだろう。

カラーのせいか、タンカラーと比べると少々大人しめな外観に仕上がった今回のデルタカスタムブラックだが、その実力は折り紙付きだ。タンカラーはハデ過ぎると敬遠していたユーザーも、ブラックモデルならば安心して使えるのではないだろうか。

デルタ装備に欠かすことの出来ない1挺となる『HK416 DELTA CUSTOM Black』をぜひその手にして欲しい。

HK416 デルタカスタム ブラック
●全長:711㎜/787㎜(ストック伸長時) ●装弾数:82発
●重量:3,365g ●価格:69,800円